

# 家族造形法の深度

最終回

早樫 一男

And 興津真理子・堀江幸代・西野真理

## お知らせ

前回は紹介しましたが、月刊の「ケアマネジャー」（中央法規出版 2013年2月号から5月号）に「家族造形法を使った事例検討会」が連載されました。ぜひ、一読ください！

## 今回は…

今春、同志社大学心理学部を卒業した堀江さんと西野さんが卒業論文でまとめた「家族造形法を用いた事例検討会の効果に関する検討」の要約を紹介します。

早樫は、「事例検討会に家族造形法を用いることにより、クライアントへの共感が促進される。また、クライアントの家族に関する新たな気づきが得られる」と考え、家族造形法を事例検討会に導入してきました。

我が国においては、家族造形法に関する研究論文はないと思います。そこで、興津先生のゼミ生である二人が質問紙を用いて、

家族造形法に関する研究にチャレンジしました。以下はその紹介（要約）です。

## 調査の対象は…

2012年に早樫がファシリテートした以下の研修会の参加者が調査対象です。

①日本家族心理学会第29回大会ワークショップ（24名参加 アンケート回収者15名）。

②平成24年度支援者支援研修（立命館大学人間科学研究所主催）（36名参加 全員回収）

③「京都家族造形研究会主催 現任者のための家族援助研修会」

①②においては、参加者の多くが家族造形法体験は始めてでしたので、次のようなプログラム内容としました。

まず、家族造形法についてのミニレクチャーと実際のケースをもとに全体の場でデモンストレーションを行いました。その後、小グループに分かれての家族造形法を参加

者全員が体験するといったものです。デモンストレーションで紹介されたケースの家族役割を各グループ内で担いました。

研修終了後の質問紙は、福富・坂下・塩田（2012）が作成したものをベースにしています。内容的には、家族造形法を用いた事例検討会からどのようなものが得られたかを評価してもらっています。

③は参加者 11 名の固定メンバーです。この研修会は約 10 年間、継続して実施している定例の研修会です。参加者の殆どが家族造形法の経験も豊富です。今年、初めて参加した人は 3 名でした。毎回、参加者の中から提出された事例を検討しています。アンケートは 8 月、9 月、10 月の 3 回実施しています。

### 調査結果の要約は…

質問紙の内容についての詳細は省略します（参考文献参照のこと）。

①②の参加者は、「ケースの見方」「利用者・クライアントの思いのくみ取り方」「利用者・クライアントを自分の視点とは異なった角度から見直す」といった点において、先行研究の平均値に比べ、有意差が見られました。

特に、研修会初参加の人にとっては、ケースやクライアントに対する新たな視点を得る、共感的理解が高まるなどの効果があると考えられる結果となりました。

事例検討に家族造形法を用いることによって、参加者のクライアントへの共感的理解やクライアントの家族に関する理解が深まる、事例やクライアントに関する新たな

気づき生まれ、また、多角的なケース理解が促進される、などの有効性が示唆されました。

また、「家族の変化する方向性がイメージできた」「問題や症状を持つメンバー以外の家族に焦点を当てることができた」なども高い評価が得られた。

家族造形法を使った事例検討会における診断的側面は、クライアント家族に対する理解や見立ての重層性を生み出す可能性も示唆していると考えられます。

### 今後は…

家族造形法を使った事例検討会については、参加者の臨床経験や家族造形法経験の違いによる比較研究なども重要になるかもしれません。

また、通常的事例検討会と家族造形法を用いた事例検討会それぞれの効果を比較することによって、さらに家族造形法を使った事例検討の特徴や課題が明らかになると思われます。

さらに、家族造形法による事例検討の効果が心理臨床場面において、どのように活かされているのかも明らかにしておくことも必要と、さらなる課題も提示しています。

### 感謝

卒業論文の要約を掲載するに際し、協力いただいた興津真理子さん、堀江幸代さん、西野真理さんにお礼申し上げます。

### 【参考文献：文中の先行研究】

福富昌城・坂下晃祥・塩田祥子（2012）

グループ・スーパーヴィジョン研修が  
参加者にもたらす影響—介護支援専門  
員に対する一連続研修の取り組みから  
— 花園大学社会福祉学部研究紀要

**最終回にあたって：  
家族造形法を使った  
事例検討がもたらすもの**

多忙な対人援助職場の中だからこそ、事例検討は重要なものです。準備の省力化ができる家族造形法は使えるツールです。

また、頭でっかちになるのではなく、身体を通して生まれてくるもの、感じるものにスポットを当ててみるということも、生きている人間を相手にしている者にとっては大切なことです。

具体的な援助を考えるキッカケやヒントが手に入る、援助メンバーのチームワークに寄与する、年齢や経験の差を乗り越えて発言できるといった強みも含んでいます。

児童、障害、高齢を始めとした相談現場や援助関連施設、学校や病院などの教育、医療関連機関など、さまざまな対人援助現場で家族造形法が活用されることを願っています。

それぞれの現場での活用例や展開があれば、ぜひ、教えてください。

「家族造形法の深度」は一区切りとします。

連載にお付き合いいただき、ありがとうございました。

次回からは、新しいタイトル・内容で連載予定です。